

〈密藏體性〉について

——密教の日本的展開(一)——

小峰 彌彦

はじめに

密教あるいは真言教学の研究は、『大日経』や『金剛頂経』を始めとする經典研究そして弘法大師・興教大師などの祖師に関するものとはとみに盛んである。しかし弘法大師・興教大師以降の日本密教の分野においては、残念ながらさほど研究が進められているとは思えない。そこで事相研究室では、密教が日本に受け入れられて以来どのように理解され継続・展開してきたのか、換言すれば「密教の日本的展開」とは如何なるものなのかに視点を置き、共同で研究を行うこととした。

さて、現在の真言宗を成りたたせている教学や事相の基盤は、一つには江戸期において築かれ、現在の真言宗のあり方に大きく影響を与えたといってもよいと思う。すなわち江戸期に密教がどのように理解され方向づけられたかを知ることは、日本における密教の転移を探る上で重要な一つの鍵を持つことになると考えたのである。そこで江戸期に点在する種々ある材料の中で、今回具体的に取り上げた資料は、慈雲尊者飲光の言葉を筆受した菩提華の『曼荼羅

随聞記』である。この『曼荼羅隨聞記』は、当時の日本の真言宗が抱える教学や事相の問題点を、飲光が一つ一つ箇条に提示して、その問題について飲光が示唆に富んだ自分の考え方を述べている。また飲光の弟子の菩提華は『現図曼荼羅諸尊便覽』を著した人物として知られており、その豊富な曼荼羅の知識を背景に飲光の説を論拠をあげ補足するとともに、自身の見解も述べている。

以上の理由から、我々はこの『曼荼羅隨聞記』に提示されている問題は、今日でも改めて考えねばならないものと認識した。そこで事相研究室では『曼荼羅隨聞記』に掲げられたテーマを室員がそれぞれに担当し、次のような形で研究を進めまとめることとした。

- ① 慈雲尊者の説の現代語訳
- ② 菩提華の説の現代語訳
- ③ 二者が提示した問題に関する検討

このような形で「密教の日本的展開」を思考するわけであるが、もとよりすぐに結論がでるわけではない。今回はその手始めとして試行するものであり、地道に進めていくうちに一応の成果がでるものと期待するものである。

① 【慈雲尊者の説】

○慈雲和上は「密教は凶像を用いるところに本質がある。これは弘法大師が惠果阿闍梨に授かった秘訣であり、我が西大寺流の親傳である。そして諸曼荼羅の中でも現図曼荼羅が最も深密なものである。しかし現図曼荼羅と『大日經

「疏」に説く曼荼羅とは、異なった内容をもっている」と言われる。

また現図という言葉に対して、ある人は「善無畏三藏が北インドのガンダーラ国の金葉王の塔の下で、空中に現れた曼荼羅を图画したので現図というのである。現れたままに図したので、この名がつけられたのである。そして空中の東に現れたものを胎藏曼荼羅といい、西に現れたものを金剛界曼荼羅という」とする。しかしこれは単なる傳説であって証拠はない。それ故にこの説は採用できない。なぜなら、仮にこの説が正しいとすれば、まず中央があつてその上で金剛界は西方にあり、胎藏は東方にあることになる。そうなると曼荼羅の「周遍法界」という考えと矛盾する。大日如来は両部の曼荼羅とも中央に位置する。どうして東とか西とかいえないようか。東の曼荼羅とか西の曼荼羅とかいう真義は、行者が觀法するときの場所と作法とを言うのである。こういった理由から西大寺流では、弘法大師以来師資相承し図画し、現行流布してきた曼荼羅を現図というのである。これが正義である。

以上のような名についての議論はいささか薄いものであるが、内容については深いものがある。たとえば曼荼羅を智として見る場合には、一（あるいは多）法界一切が金剛界曼荼羅であつて、胎藏はない。また曼荼羅を理として見る場合は、多（あるいは一）法界一切が胎藏曼荼羅であり、金剛界はない。この考えが当流の正傳である。それ故にこの自性法界（悟りの世界）の法（ありかた）として、眞理（理）と現象（事）はお互いに融合しているものであつて、眞理には智恵の働きがともない、智恵の背後には眞理がある。たとえば、太陽は本来的な悟りを現し理である、と知るべきである。月は行者が修行して得た智恵を意味する。従つて月は西にあるといつても、東を無尽に照らす。智恵が働くところに眞理がある。それ故に兩部は理と智が互いに不二であることを現す。天台密教では、兩部は不二といわずただ智と理と區別するのみでその他に蘇悉地をたてる。曼荼羅の高遠であることは、もとよりこれらの理由によるものである。

○またの説に、現図とは弘法大師請来の曼荼羅を総称していうのである。大師の所傳した高雄神護寺にある金泥曼荼羅がそれである。あるいは青龍和上の口傳によるとされる。東寺の五彩の曼荼羅も現図曼荼羅である。現図曼荼羅の本は、高雄に現存する曼荼羅を言う。

○また現図曼荼羅以外に、弘法大師の後に入唐した宗叡が請来した曼荼羅がある。今は洛東の禅林寺にある。この曼荼羅に図繪された諸尊は、東寺の曼荼羅と比較すると相違がある。入唐八家の僧がもたらした曼荼羅も、さらに相違がある。志しのある者は、これら曼荼羅について詳細に研究すべきである。

○また小野・広沢などの諸流は、お互いに弘法大師の正嫡を主張して争っている。しかしいまだにその優劣を決着しがたい。しかしこれも曼荼羅の教えに叶うかどうかで、正嫡か否かを決定すべきである。このような見方が密教者としての正しい見解である。

② 【菩提華の説】

○菩提華説・高雄曼荼羅と東寺曼荼羅との相違点は、金泥か彩色かの違いのみで（内容的な違いはない）ある。

○密教が曼荼羅を以て本質とするとは、『秘蔵記』に「問う、秘蔵は何を以て體・宗・用とする。答う、曼荼羅を以て體とする。三昧耶を以て宗となす。方便を以て用とす。問う、曼荼羅を以て體となす、その意は如何。余もまた然なり。答う、曼荼羅は本初不生の心地なり。是れ即ち體なり。云々⁽¹⁾」とある如くである。

『経疏』の説く曼荼羅を浅とし「現図曼荼羅」を深とするのは、小野流が嫡々相伝してきた考え方である。それは、もし経と儀軌に違いがあれば、経より儀軌を優先し、儀軌と相承に違いがあれば相承をとるからである。たとえば『理趣経』第二段に結ぶ印については、経には智拳印とあるが、相承では如来拳印といったことである。

また『大日経疏』は多く東因発心の説を説き、三密観図では中因発心を示している。そして中因発心説を、本有本覚を現すということと本とする。修生を旨とするから浅とするのである。また『大日経疏』には「往々に」とか「更に問え」とか「この教えは口傳相付を以て本とする」などという。あるいは「慢法の人を制するためにわざと経を変乱する」などという。弘法大師も「秘藏の奥旨は文で得ることはできない。心を以って心に伝えるものである。その立場にたてば文は槽のようなものであり、瓦礫のようなものである。」と述べている。経疏と現図の浅深は以上のことから知るべきである。

③【まとめ】

今回は「密蔵体性」のテーマに対しての研究に及ぶことができなかったことから、非常に遺憾であるが飲光・菩提華の現代語訳にとどめることとした。ここで飲光が掲げた「密蔵体性」論ずる中で、密教の本質は曼荼羅にあるという立場に立つ。そして曼荼羅に関する様々な問題に対し持論を展開する前に、飲光自身は西大寺流の立場に立つ旨が宣言されている。その上で曼荼羅に関する最初の問題として、まず現図曼荼羅の「現図」に関して所見を述べている。そして金剛界曼荼羅は智であり、胎蔵曼荼羅は理として見るべきことを主張している。

最後に小野流と広沢流が、互いに正嫡を争っている旨が述べられている。この問題に対し飲光が「曼荼羅の教えに叶うか否か」が重要な鍵であることを指摘していることは、我々が事相をどう考えるべきかを示唆しているとも捉え

られる。この問題は菩提華が、經と儀軌と相承との三をあげ、何を優先すべきかを述べている。ここで菩提華は相承の重要性を主張しているのであるが、極端に走ると真意が見失われることになるので、今後の研究課題としておく。

註

(1) 『弘法大師全集』以下『弘大全』第二輯四四頁。但しこ

こでは「曼荼羅は本初不生の心地」とあるが、全集では「曼荼羅の本初不生の理」となっている。そして曼荼羅の本初不生の理が体、三平等互相攝入し平等平等なるを宗、仏果にいたる修行の因の方便と成仏以降の果の方便を用いている。

(2) 「東因発心と中因発心」については拙論(『現代密教』第2号・一三二以下)参照。但しこの小論では「三密観図」

には触れていない。「三密観」は『略出念誦經』や『秘藏記』に説示される。しかしそれは「その卍字を以て身口意に安置し、五鈷金剛と観じて加持すれば、則ちよく無始以来の三業の罪障を除滅すること、金剛がよく一切の物を推破するが如し」(『秘藏記』弘大全第二輯十九頁。)とあり、この文のみでは曼荼羅の中因発心説とは直接結びつかない。しかし『秘藏記』はその後に中因発心の説をあげ、修生と本有に関連した文をのせている。これとの関連とも見られるがこれについては今後の課題とする。